

筑波変成岩製埋葬施設の編年

富 田 樹

はじめに

常総地域の後・終末期古墳は、盗掘によって副葬品が判明しないものが多い上に、そもそも須恵器を埋葬施設内に副葬することが少ない（日高 2000b）など、時期決定が困難である。そのため、埋葬施設自体の編年が必要不可欠である。

常総地域の後・終末期古墳の代表的な埋葬施設は、箱形石棺と横穴式石室である。このうち、箱形石棺の編年は茂木雅博（1966）による石棺の構築位置や使用方法に着目した研究を嚆矢とする。石棺自体に着目した研究では、石棺の内法や石材の使用方法、石棺における埋葬行為から検討されてきた（黒澤 1993, 石橋 1995, 荒井 2020 など）。

横穴式石室の編年は、石川功（1989）、稲村繁（1991）、石橋充（1995）、日高慎（2000a）が行っている。これらを要約すると、壁面構成が小型石材の割石積みから板石組へ、平面形が長方形から正方形へ変遷すると考えられている。また、小林孝秀（2004）や草野潤平（2016）は、常陸南部が筑波山南東麓⁽¹⁾と霞ヶ浦高浜入り沿岸の小地域差を重視している。

現在提示されている変遷観は、埋葬行為との連関が認められる（荒井 2020）など歴史的意義が見出せるため、一定の説得力がある。しかし、箱形石棺と横穴式石室の相互関係が明瞭でないことに問題がある。石橋充（1995）が階層差を踏まえて時間的な併行関係を整理した以外には、箱形石棺と横穴式石室を包括的に論じた研究は見受けられない。そこで、前述した研究に学びつつ、各埋葬施設の編年と相互関係について検討を加えたい。

なお、本稿で扱う資料は、筑波変成岩を使用する埋葬施設である。その理由として、筑波変成岩が常総の内海を介して常総地域全域に流通し、使用される主要な石材であることがあげられる。また、常総地域には軟質砂岩を用いた埋葬施設も存在するが、軟質砂岩と筑波変成岩では石材としての性質が異なるため、使用に際してよって立つ技術や使用方法が異なる。つまり、構造的な比較を目的とするため、筑波変成岩製埋葬施設が適しているのである。

I. 時期区分とその根拠

本稿で用いる時期区分を明らかにしておきたい（図 1）。本稿では、田辺昭三（1981）の陶器編年、西弘海（1978）の飛鳥編年を基軸とし、「MT15 型式期」「飛鳥 I 期」と表記する。ま

た、常総地域には湖西産須恵器も多く存在するため、鈴木敏則（2001）の湖西編年も用いる。湖西産のフラスコ瓶や平瓶といった瓶類については、高橋透（2009）の編年が有効だと考え、使用する。

ただし、先述した通り須恵器の出土例が多くないため、須恵器に加えて副葬品の編年も参考にする。鉄鏃については水野敏典（2003）による編年を基本とし、終末期の鉄鏃については平林大樹（2013）による編年も使用する。また、直刀は臼

杵勲（1984）による編年を、馬具については内山敏行（2013）や岡安光彦（1984）の研究などを参考にして年代を与えた。

なお、本稿では古墳時代後期を TK47 型式期以降と考える。この地域においては、人物埴輪が出現するなど古墳様式が前代までと大きく異なる三味塚古墳の登場が、画期として認識されるためである（佐々木 2018 など）。また、古墳時代終末期については、埴輪樹立後、すなわち概ね TK209 型式期以降とする。本来であれば前方後円墳終焉以降とすべきだが、常総地域は前方後円墳の終焉が遅れる。そのため、埴輪祭祀が終了するなど、埴形以外の古墳様式が変化することを重視したい。

暦年代については、基本的に白石太一郎（2009）の説に依った。また、5 世紀末と考えられる Hr-FA 下から MT15 型式併行の須恵器が出土していることから MT15 型式期の開始時期を 5 世紀末とする藤野一之（2009）の見解を重視する。飛鳥編年の暦年代については、その高精度化を目的とした「奈文研・歴史時代土器研究会共催シンポジウム」（奈文研編 2019）における成果を参考とした。

Ⅱ．箱形石棺の編年

（1）分析視点

箱形石棺の編年は、先述したように、床石や長側壁の形態に基づいて行われてきた。それぞれの編年については概ね妥当だと考えられるが、それぞれ細部では批判もある（黒澤 2005）。また、上野恵司（1993, p. 72）の「箱式石棺の時期的構造変化は、埋葬方法の変化と呼応する」という指摘を考慮する必要がある。このような点で、埋葬行為という観点から箱形石棺の変遷を示した荒井啓汰（2020）の検討は高く評価できる。

そこで、荒井の検討を援用しつつ、石棺の機能や視覚に関する要素を抽出し、その消長によっ

時代区分	歴年代	須恵器				鉄鏃	
		陶器編年	飛鳥編年	湖西編年	高橋編年(瓶類)	水野編年	平林編年
古墳時代後期	500	TK47		I 末		中期5	
		MT15		II			
		TK10		III 前		後期1	
	550	MT85		III 中		後期2	
		TK43		III 後			I
	600	TK209					
古墳時代終末期	650	TK217	飛鳥 I	III 末	I	後期3	II
		TK46	飛鳥 II ~ IV	IV 前 ~ 後	II		
	700	TK48	飛鳥 V	IV 末	II ~ III III		III

田辺 1981, 西 1978, 鈴木 2001, 高橋 2009, 水野 2003, 平林 2013 に基づく。

図 1 本稿における時期区分

て編年を行う。なお、本稿における編年の目的は、埋葬施設の構造に着目した包括的な把握と、盗掘などで副葬品が判明しない古墳について研究の俎上に載せることである。そのため、人骨や副葬品の状況については扱わない。

(2) 箱形石棺の諸要素と変遷 (図2, 3, 表1)

先述のように、箱形石棺自体に見られる諸要素について、機能に関わる要素、視覚に関わる要素、両者に跨がる要素の3つに分類し、その特徴を明らかにする。

①機能に関わる要素

石棺の高さ 荒井によって検討されている。荒井は、70cm未満のものと70cm以上のものに分類している。前者は石棺

の上面から手を伸ばして遺体を入れたり動かしたりすることが容易な石棺であり、後者は石棺上面から手を伸ばすことは困難だが、蓋石を閉めた状態でも内部でしゃがんで行動できる石棺だとする。しかし、時間的変化に着目する際は60cmを境界とすべきである(図3)。この差は、荒井は身体を基準に演繹的に分類を行い、筆者が石棺から帰納的に分類を行っていることに起因すると思われる。高さ60cmの意味を身体から説明するならば、60cm未満であれば石棺上から手を伸ばした際に余裕を持って動かすことができ、60cm以上であれば首をすぼめてしゃがみ込めば内部で行動できる高さといえよう。

高さ60cm未満の石棺はTK43型式期以前に多くみられ、高さ60cm以上の石棺はTK43型式期にやや増加し、TK209型式期以降に主体となる。

石棺の幅 荒井によって検討されている。内法の幅が70cm未満のものと70cm以上のものに分

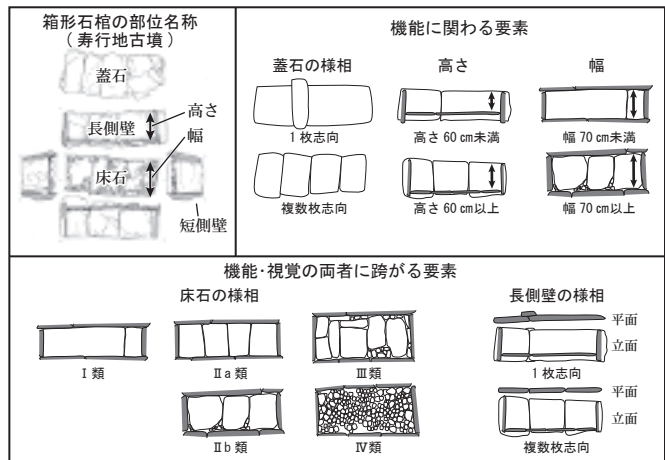


図2 箱形石棺の諸要素

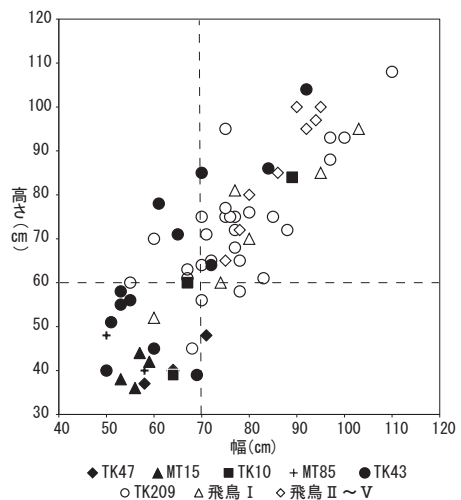


図3 石棺の高さ・幅と時期の関係

類している⁽²⁾。前者は初葬時に成人を2体並列で埋葬することが難しいものであり、後者は2体並列で埋葬できるものとする。

TK43 型式期以降に、70cm 以上の石棺が増加しており、TK209 型式期以降に主流となる。また、幅の増加は高さの増加と連動していることが分かる（図3）。このことは、内部で行動出来る石棺への変化という認識を補強する。

蓋石の様相 蓋石が板石1枚のものと、板石2枚で構成され、目地を埋めるように合わせ目に小石材を置くものを蓋石が1枚を志向するものと考え、蓋石が3枚以上のものと区別する。1枚を志向するものは密閉志向が強く、一度蓋石を閉じてしまうと開棺するのに手間がかかると言える。逆に、蓋石が3枚以上の場合は、そのうちのどれか1枚を除去すれば開棺でき、追葬など石棺内に入る行為の効率化に繋がる。

蓋石が1枚を志向するものは、TK47 型式期から TK10 型式期にかけて主体的に認められる。その後は、1枚志向のものはほとんどみられなくなる。1枚志向から複数枚志向への変遷は、高さや幅が増加することと連動し、追葬など石棺内での行為との関連が指摘できる。

表1 箱形石棺の諸要素と時期

古墳名	幅70cm 以上	高さ60cm 以上	長側壁 1枚志向	蓋石 1枚志向	赤彩	床	時期
富士見塚	●		●	●	●	I	TK47
三昧塚			▲	●	●	I	TK47
要害山3号			●			I	MT15
甲山①			●	●	●	I	MT15
甲山②			●	●	●	I	MT15
上野			●	●	●	I	MT15
舟塚	●	●	●	●	●	I	TK10
大塚5号			▲	●	●	I	TK10
風返大日山			●	●	●	I	TK10
光佛			●	●	●	I	TK10
大塚13号				●	●	I	MT85
片野10号						IIa	MT85
大生西1号		●				IIa	TK43
東台13号		●				IIa	TK43
樟山7号						IIa	TK43
東大沼7号	●	●	▲			IIa	TK43
太田	●	●	▲	●	●	I	TK43
専行寺			●		●	I	TK43
姥里						IIa	TK43
十老山				●		IIa	TK43
金杉1号	●	●				IIa	TK43
出口5号						IIa	TK43
高野山1号③					●	IIa	TK43
高野山2号		●				IIa	TK43
高野山4号						IIa	TK43
小田1号					●	II ?	TK43
舟塚山10号	●	?				IIa	TK209
四万騎1号	●	●			●	IIa	TK209
松延2号	●	●	▲	●		IIa	TK209
風返稲荷山②	●	●	●			II	TK209
塚山	●	●			●	III	TK209
山川3号	●	●				III	TK209
梶山	●	●	●			IIb	TK209
塔宮台1号		●				IIa	TK209
日光山10号		●				IIa	TK209
台の内①	●	●				IIb	TK209
台の内②	●	●				IIa	TK209

古墳名	幅70cm 以上	高さ60cm 以上	長側壁 1枚志向	蓋石 1枚志向	赤彩	床	時期
油作1号	●	●				IIa	TK209
池向11号	●	●				IIa	TK209
石川1号	●	●				IIa	TK209
清水12号	●					IIb	TK209
清水16号		?				?	TK209
物井1号(清水11号)	●	●				IIa	TK209
御山15号	●	●	▲			IIb	TK209
間見穴6号	●					II	TK209
平戸台2号	●	●				IIa	TK209
人形塚②	●	●				IIa	TK209
経僧塚②	●	●	▲			IIa	TK209
富士峰①	●	●				IIb	TK209
富士峰②	●	●	●			IIb	TK209
富士峰③	●	●	▲			IIb	TK209
東台6号		●	▲		●	IIa	TK209
池向6号		●				IIa	TK209
野中3号	●	●				IIb	TK209
間見穴5号						II	TK209
丸山13号	●	●				I	TK209
宮前						IIb	飛鳥 I
瓢塚40号	●	●	▲			III	飛鳥 I
野中5号	●	●				IIa	飛鳥 I
清水5号	●	●				IIb	飛鳥 I
武者塚2号	●	●	▲			III	飛鳥 I
下河原崎高山5号①	●	●				III	飛鳥 I
平戸台8号						IIa	飛鳥 I
寿行地古墳	●	●				III	飛鳥 II ～
岩名5号		?				?	飛鳥 II ～
鶴口2号	●	●				IV	飛鳥 II ～
野中4号	●	●				IV	飛鳥 II ～
御山54号	●	●			朱線	IV	飛鳥 II ～
原1号	●	●				IV	飛鳥 II ～
市之代6号	●	●				IIa	飛鳥 II ～
立台1号②	●	●				IV	飛鳥 II ～
龍角寺24号②	●	●				III	飛鳥 II ～
栗野 I -49号	●	●			●	IV	飛鳥 II ～

▲は大型板石と小型板石で構成されるもの

②視覚に関わる要素

赤彩 荒井によって検討されており、TK10 型式期以降に激減するとした。この指摘は概ね首肯でき、TK43 型式期にかけて徐々に数を減らしていく。

③機能・視覚の両者に跨がる要素

長側壁の様相 阿久津久（1992）や黒澤彰哉（1993）の視点に通じる。長側壁が板石 1 枚で構成されるものと、長側壁が板石 2 枚で構成され目地を埋めるように小石材を置くものを、長側壁が 1 枚を志向するものとして、他のものと区別する。また、大型の板石と小型の板石を 1 枚ずつ使用する場合も、1 枚を志向している可能性があるものの、石材流通との関連も考えられるため、積極的な評価は難しい。

1 枚志向のものが、TK47 型式期から MT15 型式期にかけて主体的に存在する。これは、密閉された「棺」を意識している可能性がある。

床石の様相 石橋充による分類（石橋 1995）を、以下の 5 つに再構成する。

- ・Ⅰ類 内法の 2 分の 1 を超える板石を含み、1～3 枚で構成。
- ・Ⅱ a 類 内法の 2 分の 1 を超えない板石 3 枚以上で構成され、隙間無く敷かれる。
- ・Ⅱ b 類 内法の 2 分の 1 を超えない板石 3 枚以上で構成され、隙間に割石を詰める。
- ・Ⅲ類 不定形な板石を組み合わせ、割石を併用して構成。
- ・Ⅳ類 割石・河原石・木炭などを敷きつめて構成。

石橋（1995）の指摘どおり、概ねⅠ類→Ⅱ a 類→Ⅱ b 類→Ⅲ類→Ⅳ類と変遷する。石橋が述べるように「棺」としての意識の消失の過程として捉えられよう。さらに、黒澤彰哉（2005）がⅣ類の床石を横穴式石室の影響と指摘したことに着目したい。横穴式石室の床面には、風返稲荷山古墳のように不定形な板石を組み合わせたものも多く⁽³⁾、Ⅳ類だけでなくⅢ類との類似性を指摘できる。つまり、横穴式石室の影響が表われている可能性がある。

(3) 箱形石棺の変遷とその意義

以上の諸要素の変遷から、箱形石棺を 4 つの段階に区分することが出来る（図 4）。1 段階は TK47 型式期から TK10 型式期までである。蓋石、長側壁ともに 1 枚を志向し、赤彩が顕著に認められる。2 段階は MT85 型式期から TK43 型式期までである。長側壁や蓋石の 1 枚志向と赤彩はこの時期まではある程度残存する。さらに、Ⅱ a 類の床石や高さ 60cm 以上、幅 70cm 以上の石棺が登場するなど、過渡期的な様相を示す。3 段階は高さ 60cm 以上、幅 70cm 以上の石棺に代表されると、床石がⅢ類とⅣ類のものが主体となる。

以上の変遷の意義を一言でまとめるなら、「棺」の「室」化（荒井 2020 など）である。人骨などの出土状況からみた埋葬行為の変化と一致するという指摘（荒井 2020）を、視覚的にも機能的にも追認できる。さらに、床石の様相の説明で詳述した通り、横穴式石室の構造との具

体的関連性も指摘することが出来る。

最後に、箱形石棺の祖形について触れておきたい。後期の開始を飾る三昧塚古墳の箱形石棺には、蓋石の側面に縄掛突起が存在するなど、「長持形石棺」からの影響が窺える。常総地域には5世紀前半の三ノ分目大塚山古墳に長持形石棺が存在しており、同じ筑波変成岩を用いていることなどから、三昧塚古墳石棺の祖形と考えて良い（石橋 1995）。しかし、両者には50年以上の年代差があり、その形態も大きく異なる（筑波大 2020）。また、5世紀中葉以降と考えられる舟塚山 14号墳では、縄掛突起などは確認できないものの、蓋石に側壁を受ける溝が存在する。この溝の存在から三ノ分目

大塚山古墳とは別系統と想定する意見もある（黒澤 2005）が、長持形石棺の影響と捉えることもできよう。以上のように、限られた資料から類推すると、箱形石棺は長持形石棺を祖形として5世紀後葉頃に成立したといえる。そして、長持形石棺の記憶が5世紀を通して残存し、5世紀中葉には蓋石の溝として、5世紀後葉には特異な位置の縄掛突起として、その特徴が発現したのではなかろうか。

Ⅲ. 横穴式石室の編年

(1) 分析視点

近年の常総地域の横穴式石室研究は、常総地域の中の小地域性に着目する方向で行われている（小林 2004, 草野 2016）。しかし、日高慎（2019）が指摘するように、大きくみれば同じ筑波変成岩を使用し、その産地も限定されることから、石室の変遷の大きな流れは共通する可能性が高い。さらに、地域差の認定方法についても問題がある。例えば、小林（2004）は側壁のL字形切り込みやL字・コの字の加工玄門を筑波山南東麓の地域的特徴と捉え、下野地域の影

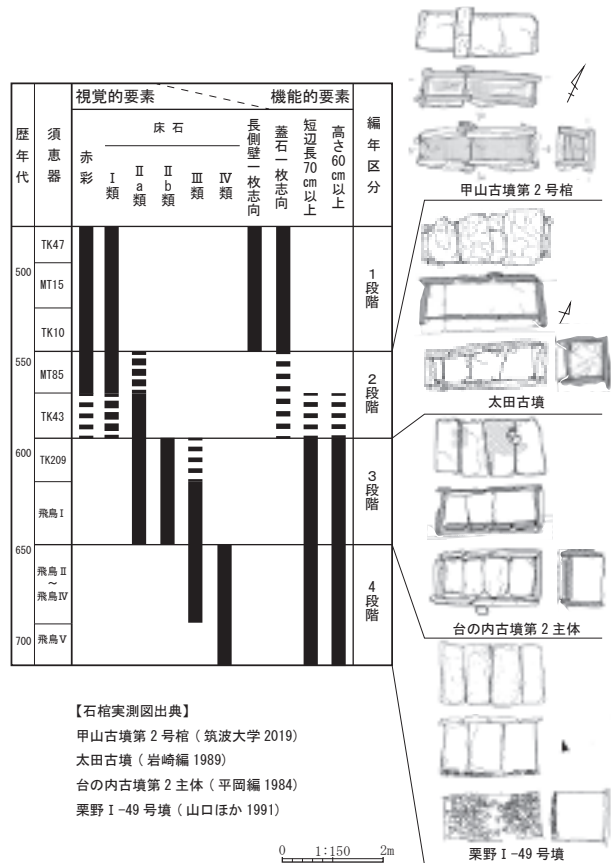


図4 箱形石棺の編年

響で成立したものとし、7世紀初頭を中心とする時期とする。しかし、側壁のL字形切り込みは楣石を架構するためのものであるが、同じ機能を持つ挟り込みは霞ヶ浦北東岸の風返稲荷山古墳にも認められる。また、L字・コの字の加工玄門を採用する古墳を7世紀初頭の築造とする根拠は無く、むしろ平沢1号墳が7世紀中葉以降の常陸の上位階層が採用する長方形墳であることなど、新しい時期のものと考えるのが自然である。草野（2016）は、霞ヶ浦北岸の板石組石室を箱形石棺を母体として成立したとするが、太子唐櫃古墳は割石を併用するなど、説明が不十分である。

このように、地域内の地域性に着目する研究には、その論証方法や各古墳の位置付けに問題がある。また、特に霞ヶ浦北東岸として括られる地域は横穴式石室の調査例が少ないため、地域的特徴の把握は難しい。ただし、小林（2004）が論じた横穴式石室の受容・展開過程の違いや、草野（2016）が説く石室内石棺の差⁽⁴⁾など、小地域性を認識しうる指摘もある。下野や九州からの影響についても、傾聴に値する。しかし、現状では常総地域の筑波変成岩使用横穴式石室全体を包括して検討するのが穏当である。

さて、横穴式石室の場合、箱形石棺に比べて構造が複雑になりやすく、石材も大きくなることから、その構築が困難になる。そのため、横穴式石室を構築する専門集団の存在を推測できる。つまり、同様の技術を用いた石室は、同一の技術を保有する集団が構築したと考えることができる。また、石材を積む、石材を立てて据えろといったように壁面の石材使用法に、根本的な石材使用技術の違いが表れると考えられる。つまり、壁面構成の違いが、それぞれ異なる技術系統を反映しているといえる。以上のことから、まず壁面構成によっていくつかの形式に整理し、その後、時間的変化を反映する要素について検討し、型式を設定し編年を行う。

（2）分類の方法（図5）

最初に、壁面構成によって割石積形式、板石・割石併用形式、板石組形式に分類する。このような石室群を「大別形式」として区分する。先述した通り、石室構築の際の技術系統が異なると考えられる。さらに、板石・割石併用形式を板石の使用範囲によって細分する。

次に、平面形態によって分類を行う。割石積形式、板石・割石併用形式については、平面形態によって細分する。板石組形式については、単室か複室かによって分類する。以上、壁面構成と平面形態によって分類された石室群を「細別形式」として区分する。

細別形式のうち、年代差を想定できる形式について、用石法の組み合わせを基に型式を設定する。しかし、遺存状態の悪い石室が多いため、遺存度が良い例が多い板石組複室形式のみ型式を設定し検討した。用石法については、日高慎（2000）の示した楣石構造や玄門構造が有効な要素となる。それらに加えて天井架構法と、玄室と前室（羨道）の境の天井部構造に着目する。

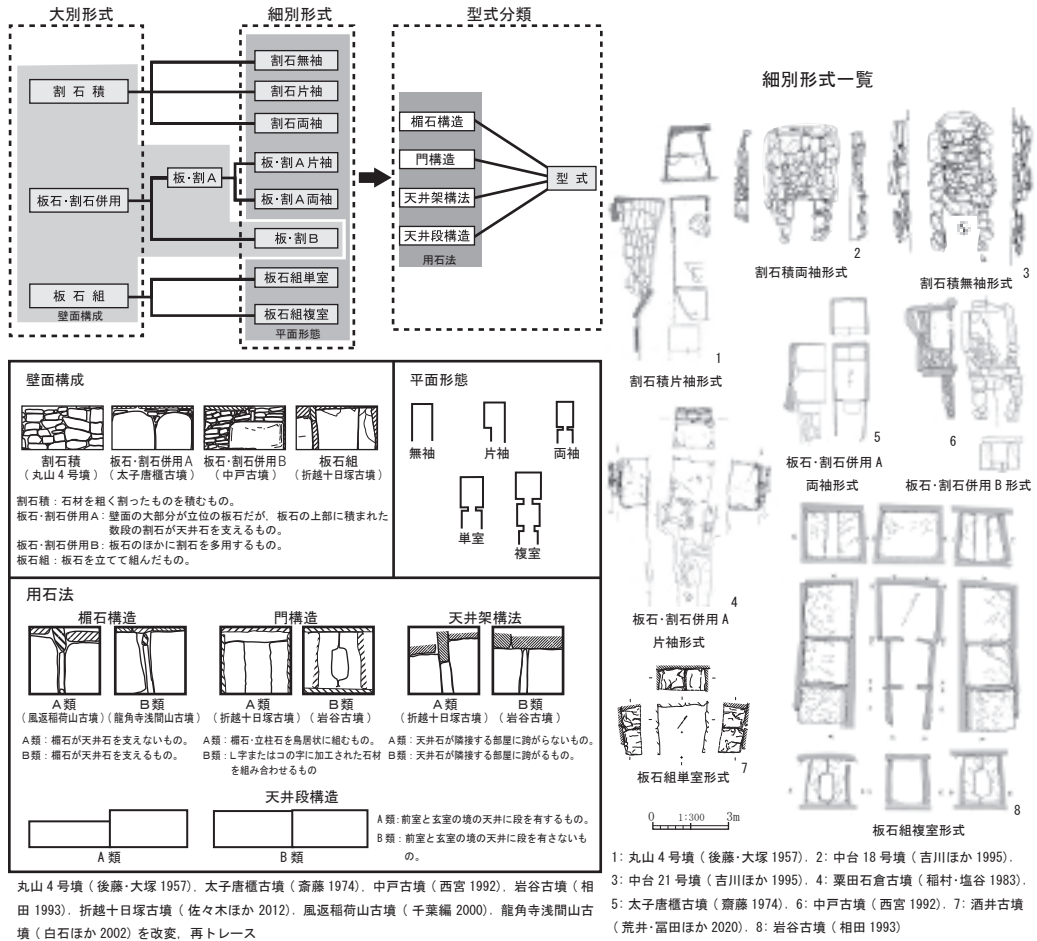


図5 横穴式石室の分類方法と細別形式

(3) 型式の設定と変遷 (図6)

まず、楣石構造について他の要素との関係をみていく。楣石A類となる石室は、他の要素が全てA類となる。楣石A類とB類の両者を備える石室、または楣石B類のみとなる石室については、他の要素との明瞭な関係性は確認できない。つまり、A類のみで構成される石室を型式設定できる。この型式を板石組複室I型式とする。

次に、門構造について確認する。門構造A類となる石室は、他の要素との強い関連性は想定できない。しかし、門構造B類を採用する石室は、他の要素がB類となる傾向がある。このことから、門構造B類を採用する石室を、一つの型式として認定できる。なお、平沢4号墳の天井架構造がA類となるのは、やや小型な石室であるためという説明が可能である。さらに、門構造A類を採用し、他の要素がB類となるものを型式として設定できる。

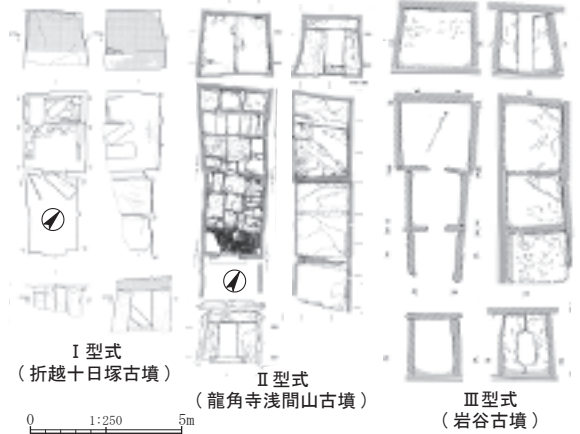
日高(2000)の指摘のように、門構造B類はA類が変化したものと考えられるため、これ

らの型式は板石組複室Ⅰ型式よりも後出する。また、他の構造もB類がより効率的な用石法と捉えることができるため、B類の後出性を指摘しうる。よって、後者を板石組複室Ⅱ型式、前者を板石組複室Ⅲ型式と命名し、Ⅰ型式からⅡ型式を経てⅢ型式へと変遷すると想定したい。この変遷観は、出土遺物や墳丘から想定される年代とも矛盾しない。

また、Ⅰ型式については、複室構造の空間区分方法に着目すると、榎石による平面的な空間区分を行うものと、立柱石を採用することで立面的な空間区分を行うものに細分できる。草野潤平(2016)や小林孝秀(2014)が指摘するように、複室構造の定型化として捉えられ、前者から後者への変遷が想定できる。そのため、前者を板石組複室Ⅰ型式古段階、後者を板石組複室Ⅰ型式新段階とする。

最後に、型式分類ができない細別形式について、出土遺物などに基き年代を与え、相互の影響関係を示しておく(図7)。まず、この地域で最初に登場する横穴式石室は6世紀前半の高崎山2号墳であるが、こ

古墳名	側壁	天井	天井段	榎石構造	門構造	構造	構築位置	時期
中台2号	板石組	—	—	—	A	複室	地上	TK43
鳳返稲荷山	板石組	A	A	A	A	複室	地上	TK209
折越十日塚	板石組	A	A	A	A	複室	地上	?
平沢3号	板石組	A・B	B	B	A	複室	半地下	TK209?
兜塚	板石組	A	B	B	A	複室	地上	TK209~飛鳥Ⅰ
龍角寺浅間山	板石組	A	B	A・B	A	複室	地上	飛鳥Ⅰ
栗村東6号	板石組	—	A	—	A	複室	半地下	?
小田2号	板石組	A・B	B	A・B	A	複室	地上?	?
船玉	板石組	A	A	A・B	A	複室	半地下	?
高山	板石組	A	A	B	A	複室	半地下	飛鳥Ⅰ以前
平沢1号	板石組	B	B	B	B	複室	半地下	飛鳥Ⅱ以降
岩谷	板石組	B	B	B	B	複室	地上	?
平沢4号	板石組	A	B	B	B	複室	半地下?	?



折越十日塚古墳(佐々木ほか2012)、龍角寺浅間山古墳(白石ほか2002)、岩谷古墳(相田1993)

図6 板石組複室形式の諸要素と時期

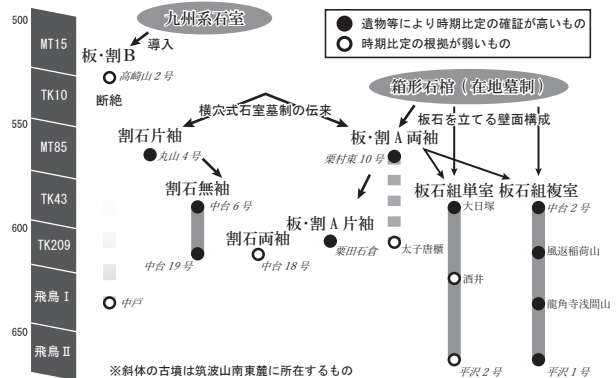


図7 各細別形式の時期と関係性

これは九州系と捉えられる(小林2005)。この石室系統は継続しない。やや時間を経て、6世紀後半に片袖の平面形を持つ石室が導入される(小林2004, 草野2016)が、全ての片袖の石室が導入期のものとはいえない。また、同時期に板石・割石併用A両袖形式も導入される。後者は、板石を立てて使用しており、箱形石棺と共通する。箱形石棺の構造を母体として、横穴式石室の情報を取り入れて成立したと評価できる(小林2004, 草野2016)。さらに、板石・割

石併用 A の壁面構成から板石組の壁面構成への変化は容易に想定できるため、板石組形式は板石・割石併用 A 形式から派生したと考えられる。

以上のように、石室形式の影響関係や変遷は、小地域に分けて考える必要はないことがわかる。ただし、割石積形式が筑波山南東麓にのみ認められる点や、横穴式石室の導入が筑波山南東麓から始まる点など、小地域性の存在は確認できる。

V. 埋葬施設の様式的把握

ここまで箱形石棺と横穴式石室の検討によって、それぞれの変遷観が明らかとなった。それらを踏まえて、埋葬施設の様式的把握を試みたい。4 期に区分できる (図 8)。

1 期 1 段階の箱形石棺に代表される。横穴式石室は、常総地域での初源として位置付けられる高崎山 2 号墳があるが単発的受容に留まるため、基本的に存在しない。TK47 型式期から TK10 型式期である。

2 期 横穴式石室が展開する時期であり、割石積形式や板石・割石併用形式が採用される。箱形石棺は 2 段階のものとなり、幅や高さが増したものもみられるようになる。箱形石棺の変化が横穴式石室の展開と同時に起こることから、横穴式石室の影響で「室」への志向が現れると評価できる。MT85 型式期から TK43 形式期にあたる。

3 期 板石組形式が成立し普及する。箱形石棺は 3 段階のものとなる。ほとんどの埋葬施設が「室」もしくは「室」的なものとなる。TK209 型式期から飛鳥 I 期にあたる。

4 期 箱形石棺は 4 段階のものとなり、床石の変質がみられる。また、横穴式石室と箱形石棺の折衷形態として位置付けられる「石棺系石室」(塩谷 1992, 石橋 1995, 箕輪 1996 など) が登場するなど、より「室」への志向が強まる。飛鳥 II 期以降に位置付けられる。

こうして整理してみると、箱形石棺と横穴式石室は、互いに影響を与えながら変遷していることが明瞭である。荒井 (2020, p. 189) は埋葬行為の変化を踏まえて、箱形石棺の「室」化と同時に、横穴式石室の「棺」化が認められるとし、「石棺系石室へと収斂す

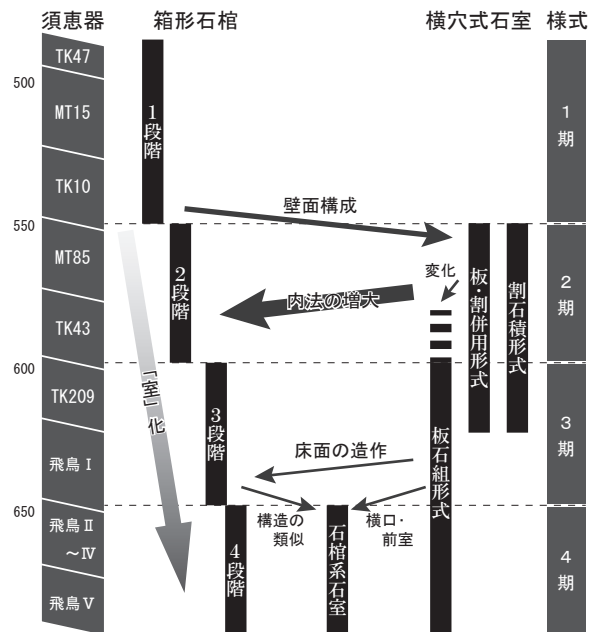


図 8 筑波変成岩使用埋葬施設の変遷と影響関係

る」と考える。しかし、板石組複室形式が7世紀中葉以降も存在し、小型化など「棺」化の様相も認めがたい。

筆者（投稿中）は、石棺系石室を含めた横穴式石室は、箱形石棺よりも高い階層性を示していること、墳丘裾部に石棺などの堅穴系埋葬施設を設置する「変則的古墳」（市毛 1963）は、横穴式石室を志向していることを明らかにした。このことから、埋葬行為を通じた形態の収斂というより、階層的制約の中での埋葬空間拡大の要求が箱形石棺の「室」化に表出したと考えたい。また、石棺系石室は、箱形石棺使用層の一部が「昇格」した結果、創出されたのだろう。

おわりに

本稿では、簡単にはあるが、筑波変成岩を使用する埋葬施設の編年について検討し、箱形石棺と横穴式石室の関係性を論じた。箱形石棺と横穴式石室は、その成立や変遷において密接な関係性を有していることを強調しておきたい。

注

- （1） 石橋（2001）が特殊性を明らかにした地域とほぼ重なり、筑波変成岩産出地周辺と言い換えることができる。
- （2） 荒井（2020）は幅 70cm 以上のものについて、100cm を境に細分する。しかし、人骨の様相などを踏まえても、明確な機能差は考えにくいので、ここでは使用しない。
- （3） ただし、横穴式石室に敷かれる床石は、不定形ではあるもののサイズが大きい。
- （4） 筑波山南東麓においては石棺内に屍床仕切石を設け、石室内には箱形石棺を安置しない。これは常総地域の横穴式石室の初源例である高崎山 2 号墳から一貫しており、霞ヶ浦北東岸とは別の志向性を指摘できる（草野 2016）。

参考文献（紙幅の都合上、分析に使用した古墳の報告書を割愛した）

- 相田美喜男 1993 「茨城県における後・終末期古墳実測調査(1)」『婆良岐考古』第 15 号, pp.77-94
- 荒井啓汰 2020 「常総地域の箱式石棺からみた古墳時代後半期の埋葬行為」『考古学研究』第 67 巻第 3 号, pp.56-75
- 荒井啓汰・富田樹・浅野孝利・山崎颯太・大村陸 2020 「稲敷市酒井古墳の測量」『茨城県考古学協会誌』第 32 号, pp.11-27
- 石川功 1989 「茨城県における横穴式石室の受容」『東日本における横穴式石室の受容』第 2 分冊（第 10 回三県シンポジウム）, pp.834-919, 千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究所・群馬県考古学研究所
- 石橋充 1995 「常総地域における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学先史学・考古学研究』第 6 号, pp.31-57
- 石橋充 2001 「筑波山南東麓における 6・7 世紀の古墳埋葬施設について」『筑波大学先史学・考古学研究』第 12 号, pp.57-73
- 市毛勲 1963 「東国における墳丘裾に内部施設を有する古墳について」『古代』第 41 号, pp.19-26
- 稲村繁 1991 「茨城県における横穴式石室の変遷—装飾古墳の背景(1)—」『博古研究』創刊号, pp.21-29
- 稲村繁・塩谷修 1983 『栗田石倉古墳—附 栗田 A・B 地点—』千代田村教育委員会

- 岩崎卓也（編）1989『太田古墳』（八千代町埋蔵文化財調査報告書4）八千代町教育委員会
- 上野恵司 1993「総における古墳時代後期の埋葬施設の研究—箱式石棺—」『立正考古』第32号, pp.59-75
- 白杵勲 1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号, pp.49-70, PHALANX—古墳文化研究会—
- 内山敏行 2013「馬具」一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆（編）『副葬品の型式と編年』（古墳時代の考古学4）, pp.125-135, 同成社
- 岡安光彦 1984「いわゆる「素環の轡」について—環状鏡板付轡の型式学的分析と編年—」『日本古代文化研究』創刊号, pp.95-120, PHALANX—古墳文化研究会—
- 草野潤平 2016『東国古墳の終焉と横穴式石室』雄山閣
- 黒澤彰哉 1993「常総地域における群集墳の一考察—茨城県新治郡千代田町大塚古墳群の分析から—」『婆良岐考古』第15号, pp.95-158
- 黒澤彰哉 2005「常総地域における古墳埋葬施設の特質」『婆良岐考古』第27号, pp.105-118
- 後藤守一・大塚初重 1957『常陸丸山古墳』丸山古墳顕彰会
- 小林孝秀 2004「常陸南部における横穴式石室の系譜と地域性」『専修考古学』第10号, pp.199-218
- 小林孝秀 2005「常陸高崎山西2号墳の横穴式石室に関する再検討—関東における横穴式石室導入の評価をめぐって—」『茨城県考古学協会誌』第17号, pp.113-126
- 齋藤忠 1974「大師の唐櫃古墳」『茨城県史料』考古資料編 古墳時代, pp.139-141, 茨城県
- 佐々木憲一 2018a「総括 霞ヶ浦沿岸地域における首長系譜の併存」佐々木憲一・小野寺洋介（編）『霞ヶ浦の前方後円墳—古墳文化における中央と周縁—』, pp.249-258, 六一書房
- 佐々木憲一・鶴見諒平・九重明大・木村翔・千葉隆司 2012「茨城県かすみがうら市所在古墳時代終末期の前方後円墳測量調査報告」『古代学研究所紀要』第17号, pp.131-151
- 塩谷修 1992「終末期古墳の地域相—桜川河口域にみられる小型古墳の事例から」『土浦市立博物館紀要』第4号, pp.23-32
- 白石太一郎・白井久美子・萩原恭一・萩悦久・亀井宏行・石橋宏克・郷堀英司・吉野真如・永嶋正春・比佐陽一郎・鈴木三 2002『印旛郡栄町浅間山古墳調査報告書』（千葉県史編さん資料）財団法人千葉県史料研究財団
- 白石太一郎 2009「須恵器の暦年代」白石太一郎（編）『考古学からみた倭国』, pp.441-458, 青木書店
- 鈴木敏則 2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第5分冊, pp.141-170
- 高橋透 2009「東日本太平洋沿岸地域出土須恵器フラスコ形瓶の編年—湖西窯を中心として—」『考古学集刊』第5号, pp.75-97
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 千葉隆司（編）2000『風返稲荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会
- 筑波大学甲山古墳研究グループ 2019「つくば市甲山古墳の研究—調査報告編—」『筑波大学先史学・考古学研究』第30号, pp.27-104
- 筑波大学甲山古墳研究グループ 2020「つくば市甲山古墳の研究—考察編—」『筑波大学先史学・考古学研究』第31号, pp.77-108
- 富田樹（投稿中）「常総地域における後・終末期古墳の階層性」
- 奈良文化財研究所 都城発掘調査部 考古第二研究室（編）2019『飛鳥時代の土器編年再考』（奈良文化財研究所・歴史時代土器研究会共催シンポジウム）, 奈良文化財研究所・歴史時代土器研究会
- 西弘海 1978「土器の時期区分と型式変化」奈良文化財研究所（編）『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』II, pp.92-100
- 西宮一男 1992『中戸古墳』八郷町教育委員会
- 日高慎 2000a「雲母片岩使用の横穴式石室と箱形石棺」『風返稲荷山古墳』, pp.95-107, 霞ヶ浦町教育委員会
- 日高慎 2000b「風返稲荷山古墳出土須恵器をめぐる諸問題」『風返稲荷山古墳』, pp.109-120, 霞ヶ浦町教育委員会

筑波変成岩製埋葬施設の編年

- 日高慎 2019「東国における最終末前方後円墳再考」『古墳と国家形成期の諸問題』（白石太一郎先生傘寿記念論文集），pp.196-201，白石太一郎先生傘寿記念論文集編集委員会
- 平岡和夫（編）1984『千葉県香取郡栗源町台の内古墳調査報告』山武考古学研究所
- 平林大樹 2013「信濃における後期・終末期古墳副葬品の変遷」『物質文化』第 93 号，pp.123-138
- 藤野一之 2009「Hr-FA の降下年代と須恵器の暦年代」群馬県考古学ネットワーク（編）『上毛野の考古学』Ⅱ（群馬県考古学ネットワーク 5 周年記念論文集），pp.69-78
- 水野敏典 2003「鉄鍬にみる古墳時代後期の諸段階」『後期古墳の諸段階』pp.29-42，東北・関東前方後円墳研究会
- 箕輪健一 1996「終末期古墳と石棺式石室」『婆良岐考古』第 18 号，pp.69-82
- 茂木雅博 1966「箱式石棺の編年に関する一試論—霞ヶ浦沿岸を中心として—」『上代文化』第 36 輯，pp.33-46
- 山口典子・上守秀明・田島新 1991『佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡—佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ—』（千葉県文化財センター調査報告 第 199 集）千葉県文化財センター
- 吉川明宏・新井聡・黒澤秀雄 1995『中台遺跡—（仮称）北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書—』（茨城県教育財団文化財調査報告 102）茨城県教育財団

図版出典

図 1～図 8，表 1：筆者作成，使用した報告書は図中に記載。

